

# 再発見・牛久第三十四話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

## 岡見(尾上)家と小坂城①

— 岡見(尾上)一族が築く —

岡見(尾上)家の興り

— 南北朝時代に

小田治久の二男朝義

が岡見(現岡見町)に移住 —

第96代後醍醐天皇が諸国の武將に鎌倉幕府討幕の綸旨(命令書)を発すると、まず元弘3年(1333年)1月に播磨国(現兵庫県)で赤松円心(円心はこれより前に後醍醐天皇の第一皇子護良親王の令旨を受けていた※)が奉兵し、これにつづいて同年5月に足利尊氏が六波羅(京都の鎌倉幕府の最先機関)を、新田義貞が鎌倉(現神奈川県鎌倉市)の鎌倉幕府本拠をそれぞれ攻めて鎌倉幕府を滅ぼした。

後醍醐天皇は、翌年に建武(建武元年・1334年)と改元(年号をあらためる)して親政(天皇がみずから政治を行う)を開始した。しかし、後醍醐天皇の親政は、2年たらずで破綻を来した。

折も折、尊氏が、後醍醐天皇へ叛旗をひるがえして、各地で後醍醐天皇方

と戦い、さらに延元元年・建武3年(1336年)に北朝・光明天皇を立てて、同天皇より延元3年・暦応元年(1338年)に征夷大將軍に任ぜられて京都・室町に幕府を開いた。

一方の後醍醐天皇は、延元元年・建武3年(1336年)12月に三種神器(鏡と剣と玉の三種で、これが皇位のしるし)を奉じて密に京都を脱出し、大和・吉野山(現奈良県吉野郡吉野町)に朝廷(南朝)を開いて正統性を主張した。

これより南朝・北朝両統迭立による対立が、元中9年・明德3年(1339年)の両統合併までつづく。

ところで、常陸国(現茨城県)の筑波郡小田(現つくば市小田)の小田城主小田治久は、元弘の変(1331年)では、鎌倉幕府軍に属して出陣し、後醍醐天皇の隠岐国(現島根県北東部の日本海上にある諸島)への遷幸では護衛の任にあ

たった。治久の妹美禰は、新田義貞に嫁いでい



た。そうした事情もあり、治久は後醍醐天皇の綸旨(命令書)を受けて、鎌倉を攻めた義貞軍に加わった。倒幕後に治久は、御所の清涼殿(天皇の常の居所)への昇殿を許され、後醍醐天皇の実名尊治(御名)の治を用いて治久(それまでは高知)と名乗るよう命じられた。尊氏が後醍醐天皇に叛旗をひるがえして、北朝・光明天皇を立てて、征夷大將軍になって室町幕府を開いてからの南北朝対立・争乱の中でも、治久は北朝方尊氏軍の佐竹義篤らと常陸国の各地で戦い、公卿で後醍醐天皇の側近中の側近・北畠親房を小田城に迎えた。興国2年・暦応4年(1341年)主戦派・北畠親房の地位を否定する吉野朝廷から和平派の使者律僧浄光が小田城に下向してきたため、治久は、北朝方尊氏軍に降服した。



小坂城跡

岡見(尾上)を名乗り、岡見(尾上)家が興った。

※赤松円心(則村)の子孫に、現筑西市赤浜の赤城家がある。赤城家の宗徳(明治37年(1904年)〜平成5年(1993年)は東京帝大卒業)衆議院議員(当選15回)。農相、防衛庁長官、内閣官房長官を歴任する。

小田城内において第96代後醍醐天皇の側近で公卿の北畠親房が神皇正統記を執筆する。神皇正統記とは、初代神武天皇から第97代後村上天皇(後醍醐天皇の第8皇子)に至る歴代天皇の略譜を記すとともに、大義名分論を基調として南朝後村上天皇の正統性を論じた。後の世、水戸・徳川家第二代光圀が神皇正統記を基調にして大日本史を編さんした。これは水戸学といわれている。

※画像は『牛久町史中世編(栗原功著・昭和50年(1975年)発行)』より引用。